

Wesley Hall News



2006 青山学院 クリスマス・ツリー一点火祭
(青山キャンパス)

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World

(新約聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)

No.90

2006.12.13.

特集 クリスマス

- 説教「光の中を歩む」…………… 廣瀬 久允… 2
- 中等部のクリスマス礼拝…………… 石出 道雄… 4
- 天からの賜物…………… 伊藤 秀行… 5
- クリスマス礼拝…………… 佐藤 昂之… 5
- 高等部聖歌隊 京浜病院“クリスマス会”コンサート…………… 角野 彰… 6
- 女子短期大学クリスマス行事…………… 横堀 昌子… 8
- クリスマスに寄せての信仰のメッセージ…………… 10
- キリスト教図書紹介『塩狩峠』…………… 馬越 嶺… 11
- 青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その17 …… 氣賀 健生… 12
- 私の教会 日本キリスト教団 横浜指路教会…………… 立花 慎一… 14
- 宗教センターだより…………… 15

説教

「光の中を歩む」

ヨハネによる福音書 第12章35、36節

廣瀬 久允

大学宗教主任

プラトンの『国家篇』は政治学の古典と目される名著ですが、その第7章の冒頭に記されている「洞窟のたとえ」は人間の本质を鋭くえぐったものとして、古来多くの人に感銘を与えてきました。少し前のことになりますが、ダニエル・キースが『アルジャーノンに花束を』という小説の冒頭にこのたとえを引用したことがあり、そのためプラトンとか哲学、政治学とは無縁の世界に生きていたと思っていた人々の目にも触れるようになりました。しかしまだご存じない方々のために、短く要約することから始めたいと思います。

このたとえによりますと、生まれながらの人間は、深い洞窟の奥に身動きできないように縛られていて、その背後には人工の火が燃えており、その火の前を、鳥や動物の形をした焼き物、また時には壺を抱えた人形などが動いて行きます。その影が洞窟の壁に映ると、それらを影とは知らない人間たちは、「鳥が飛んで行く」「壺を持った人が歩いて行く」などと語り合っ、無聊を慰めていたというのです。ところがそのうちの一人が、鎖を解いて後ろを振り向くと、それまで本物と思っていたのは影に過ぎないということに気づきます。さらに彼は、人工の火の背後から光が差し込んでいることを発見し、外に出て見ますと、最初は光に圧倒されて目が眩んでしまいますが、そこは太陽の照り輝く本物の世界で、鳥や花や木々が彩りも鮮やかに妍を競っています。彼は再び洞窟に戻り、仲間に対して、壁に映る影ではなく、本物の世界が実在することを教えようとします。しかしそれを

理解できない仲間たちは腹を立て、できることなら彼を殺そうとまで凶る、という言葉でこのたとえは終わっています。

プラトンの哲学は、「イデア説」と呼ばれ、「理想」「理念」などと訳されると抽象的な印象が先に立ってしましますが、イデアの語源のエイドンは「見る」という意味なので、影ではなく本物を見るということがその中心です。束縛の鎖を解き放って本物の世界を体験し、それを仲間にも伝えようとして殺されそうになる先駆者とは、プラトンの師であり、有罪判決を受けて毒杯を呼んで死んだソクラテスの姿を描いている、というのが多くの学者の一致した見解です。

さてプラトンに先立つこと二百年ほど前、捕囚の民としてバビロンで呻吟していたユダヤ人たちは、神による森羅万象の創造という壮大な神話を書き残しました。創世記第1章にある物語がそれです。この神話によりますと、神が最初に創造されたのは光であって、それも「光あれ」との命令によって、すなわち神の言葉によって、無から創造された、と記されています。この場合の光とは、後の第四の日に創られる太陽や月といった自然界の物理的な光ではありません。そうではなく、直前の「闇」「深淵」という言葉によって示されている「混沌」（文字通りの意味は、「形もなく」「中身もない」状態）に差し込む秩序の光なのです。このあたりが、日本の天照大神やギリシア神話のゼウスを初め、多くの宗教や神話が太陽崇拝を基にしているのとは大きく違っています。

さてこの辺りで本題に入って、クリスマスの

出来事と光との関係を見ていくことにしましょう。キリスト教会においてクリスマスが祝われるようになったのは四世紀になってからのことですが、その背後にはユダヤ教における「ハヌカー」（宮清め）の喜ばしい祝いや、ローマの「サターナリア」（収穫祭）があり、またとくには、冬至が過ぎて太陽が再び近づいてくること、いわゆる「一陽来復」への期待が、キリスト教における救い主のご降誕と結び付けられたとも言われています。いずれにせよクリスマスは、世の光として私たちのもたらされた救い主をお迎えする祝日なので、光が重要な象徴となっているのです。

創世記の叙述とも重なりますが、光と闇とは決して対等の存在ではなく、両者は並び立つものでもありません。このことをヨハネ福音書では、「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」（1：5）と宣言しています。この場合の「理解しなかった」はまた「勝利しなかった」とも訳することができる言葉です。

これに続いて、「その光は、まことの光で、すべての人を照らすのである」（9節）とあります。すなわちご降誕のキリスト・イエスは「すべての人を照らすまことの光」（口語訳）である、との主張がなされているのです。彼に先立つ洗礼者ヨハネについては、「光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである」（7節）という紹介がなされています。

この部分では「すべての人」という側面が強調されています。たしかに天来の光はすべての人を照らすのですが、すべての人が信じるようになるわけではないという大きな問題が残されています。「言は自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」（11節）がそのことを示しており、このテーマは第3章でより具体的に展開されています。

ヨハネ福音書の3章16節には、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」とあります。この箇所は、福音の全てが凝縮されているという意味をこめ

てルターが「小聖書」と呼んだというのでよく知られています。しかしもう少し先を読みますと、「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ」（19節）、という厳しい断罪の言葉に行き当たります。ここでは、神の御心はすべての人の救いだとしても、すべての人が信じて受け入れるのではないという事実が明示されているのです。

このように見て参りますと、「光」のイメージとして暖かな、穏やかな、というものは当然あるのですが、それだけでは不十分であり、「識別・弁別」という厳しい側面もまた同時に存在していることが判ります。それと同時に、「光」と対立する「闇」も、それ自体が悪なのではなく、闇によって善と悪との区別ができないことに強調点が置かれているのです。

第12章でイエスは、「光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」（36節）と語っておられます。光がすでに到来したのに、光の中を歩きなさいと呼びかけられているのはなぜかと言いますと、闇の中にあつて、神に背を向け、光に来ようとしないう人たちの前には自分の影があるだけで、神から遠ざかって行けば行くほど、その影の示す闇も深くなって行くばかりだからです。しかし、そのような状態から180度向きを変えて神に向き合うとき、影は背後にあつてもはや目にとまることはありません。「光の子となる」「光を信じ」るとは、そのような方向転換を意味しているのです。

クリスマスの意味をしっかりと心に刻みつけ、光の中を歩み続ける者でありたいと切に願うと共に、お一人おひとりの上に神の祝福が豊かにありますようにと祈ります。

*これは、去る12月1日にもたれた相模原キャンパスでのクリスマス・ツリー点火祭の際の説教を基に、“Wesley Hall News”紙のために書き改めたものですが、不特定多数の読者を想定しているものではないことをお断りしておきます。



中等部のクリスマス礼拝



石出 道雄

中等部教諭

中等部のクリスマス礼拝は、青山学院講堂の歴史と共に歩んできました。

それまで中等部のクリスマス礼拝は、旧大学礼拝堂で、ごく普通の（讃美歌を歌い・クリスマスの説教がある）クリスマス礼拝でした。キリスト教主義学校として、またクリスチャンにとっては特別礼拝でも、中等部生（中学生）にとっては、普段とあまり変わらない礼拝に過ぎませんでした。

青山学院講堂で中等部の礼拝が行なわれ始めた時、そのステージの広さから「単なる礼拝ではなく、ページント形式のクリスマス礼拝を行いたい」との気持ちが起り、クリスチャンの先生方を中心に、青山学院講堂の設備、先生方の担当、生徒の協力などが考えられ、笹森先生がクリスマス・ページントの構想を練られ、夏休み中から実施に向けての準備が始まりました。

ページントを始めるに当たっての協力者は下記の通り、クリスチャン教師だけではありませんでした。

錚々たる教師のスタッフと選ばれたという誇りを持った生徒（キャスト・スタッフ・聖歌隊など総勢約150名）が、聖書（旧約・新約）でキリスト降誕の意味を学ぶ時間をもち、繰り返しの練習を積んで本番（クリスマス礼拝）へ臨みました。初めの頃は、毎年同じページント

を行なっているはずなのに、担当する生徒が異なり、より演出効果を上げるために試行錯誤の連続でした。練習を中断し、舞台上に教師が集まって話し合いが行なわれたり、練習後も生徒と共に夜遅くまで（時には夜11時頃まで）討論が白熱していました。先生も生徒も無く、真剣な話し合いを行っていたことを、懐かしく思い出します。

初めの頃は中等部内で静かに行なわれていたページントも、その後、外部劇場での公演・TV録画などの依頼があった頃もあり、保護者・卒業生だけでなく、一般の方々の来場者が700人を越えた時もありました。

このようなクリスマス・ページント形式の中等部クリスマス礼拝を始めてから、今年で39年目になります。初期の頃の切磋琢磨・暗中模索・試行錯誤の状況だったページントも、現在ではマニュアル化されたプログラムで練習が進められ、39年前と同じ(?)形式で、同じページントが行なわれています。中等部創立60年間で、40年弱も同じ形式で続けられている行事は、ある種の『伝統』と言えるのかもしれませんが。

今後とも、中等部らしいクリスマス礼拝が行なわれる事を祈っています。

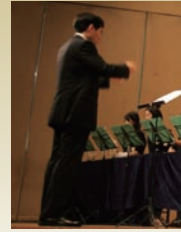
制作・構成	……	笹森建美先生（中等部宗教主任）
総合指導・舞台	……	佐藤文則先生（映画・舞台の経験あり）
朗読指導	……	浅井義継先生（浄瑠璃・哥沢の経験あり）
奏楽	……	伊藤信夫先生（教会音楽の第一人者、中等部音楽教師）
聖歌隊指導	……	斉藤美佐子先生（元藤原歌劇団団員、中等部音楽教師）
照明	……	お名前は失念（中等部学生役員、後に文化放送社員）
放送	……	川野公孝君（演劇志向の卒業生）
衣装	……	石出道雄（私です、高等学校で演劇部という経験しか無い）
キャスト	……	生徒約25名（11月中旬に依頼し1ヶ月間の練習）
十字架	……	生徒約100名（2学期末考査後、数回の練習）
聖歌隊	……	生徒約100名（学校からの指名、11月中旬から練習）
生徒スタッフ	……	視聴覚委員など生徒約25名

39年前のスタッフ一覽

天からの賜物

伊藤 秀行

中等部教諭



クリスマス・ページェントは、すべての照明が落とされた静寂の中、讃美歌 85 番「主のまことは」の女子独唱で幕を開けます。一節はソロが歌い、二節以降は女子の二部合唱が続きます。東洋的な旋律をアルト・パートが優しく支え、美しい響きが堂内を包みこみ、先駆（天使ガブリエル）からもたらされた口ウソクの灯が聖歌隊全員にまわるまで繰り返し歌い続けられます。こうしてページェントは静かに動き始め、キリストの生涯を描いていきます。

聖歌隊は、二・三年生から歌の成績を参考にして選抜した生徒により構成されており、宗教行事はもとより入学式や学校説明会においても奉仕をしています。聖歌隊として会すると一段とエネルギー溢れる表現をしてくれます。中でも一時間半に及ぶクリスマス・ページェントで

の讃美は、大きな感動と達成感を共有できる最大のイベントといえるでしょう。

練習は、二学期の期末試験後の休み期間に、まとまった時間を作って集中的に行います。本番まで数日という厳しい条件です。三日目の練習ともなると、聖歌隊は喉が、指導する私は耳が、疲労の限界に達します。しかし、生徒の潜在能力の高さと頑張りにより大いに助けられながら完成されていきます。生徒と苦勞を共にするこの時は、私にとって貴重な財産です。

今年は、中等部創立 60 周年の記念すべき年。聖歌隊は、伝統の重みをしっかりと受け止め、堂々と歌ってくれることでしょう。講堂で生徒たちが作り上げる響きは、まさに天からの賜物と確信しています。

クリスマス礼拝

佐藤 昂之

中等部3年



僕は「クリスマス・プレゼントっておもちゃなどの物だけだ」と思っていました。でも「クリスマスに贈られるプレゼントはそれだけじゃない」とクリスマス礼拝で聖歌隊として奉仕をして、そう思いました。

二年生になって聖歌隊に選ばれた僕は、クリスマス礼拝が結構退屈なものだと思っていました。本番の日、初めの方は練習やリハーサルで何度も見た光景であったのでいつも通りだなと思っていましたが、ろうそくに火がともってからは、「こんなに素敵だったんだ」と感動しました。みんなが持っているろうそくが点々と輝いていて、三年生が作る十字架も神秘的でした。薄暗い講堂の中をろうそくの火が照らして、光にやさしく包まれた感じがしました。クリスマス礼拝の前にあった点火祭でも、大学のロータリーから正門までいっばいの人がみんなろうそくに火をともしたとき、外で寒かったのに少しあたたかくなった気がしました。布団を放り投げて寝てしまったとき、そっと誰かが布団をか

けてくれたような感じです。

この感じこそ、最高のプレゼントではないかと僕は思います。暗闇の中、「あたたかい光に守られている感じ」はあまり味わえないものだと思います。僕の姉の学校でもクリスマスの礼拝がありました。でも、本物のろうそくではなくて、ろうそく型のペンライトでやっているためそういう雰囲気は出せません。ろうそくの光が生み出すのは明かりだけではなくあたたかさ僕たちに届けてくれます。僕は暗闇の中で明かりだけを求めていて、あたたかさというものを忘れてしまっていたと思います。でも、クリスマスのろうそくの光は、忘れていたあたたかさを思い出させてくれた気がしました。

これから、またクリスマス礼拝の準備が始まります。僕ができることは聖歌隊の中で歌うことだけですが、ろうそくの光だけではなく、たくさんのクリスマス・ページェントによってみんなが本当のあたたかさを思い出してくれたらいいなと思います。



高等部聖歌隊 京浜病院 “クリスマス会”コンサート

角野 彰

高等部教諭



「感動した!」「青学バンザイ!」……熊谷院長先生の心温まる感謝と励ましのお言葉、司会者の方の喜びのコメント、大勢の療養中のお年寄りとそのご家族・そしてスタッフの皆様の割れんばかりの拍手・歓声の中、京浜病院 2005 年クリスマス会の高等部聖歌隊コンサートは幕となりました。

医療法人社団京浜会京浜病院（院長・熊谷頼佳医師）は 1926 年に設立された介護保険適用の療養型老人病院で、「介護される人もする人も、そしてご家族にも、笑顔を取り戻したい」（HP より）を理念に運営されています。京浜病院では毎月の「お誕生会」などの他、年間イベントとして「春祭り大運動会」「夏祭り盆踊り大会」などの院内行事があり、その一つとして「クリスマス会」もあります。これらの行事はどれも大変盛り上がりを見せるものですが、それは「療養中のお年寄りにもそしてその家族にも笑顔を」プレゼントするために自らが笑顔をもって重労働に勤いそまれるスタッフの方々の献身的な努力に拠るところが大きく、その素晴らしいおはたらきには度々感動をおぼえます。と

りわけ、クリスチャンでもある熊谷院長先生は大変に音楽がお好きで、医療と芸術の力を持ってそれらのイベントをリードしていらっしゃいます。

私の知人が入院している事が縁で、高等部聖歌隊は昨年 12 月 15 日に初めてその「クリスマス会」においてコンサートをさせて頂きましたが、これは私たちにとってかけがえのない貴重な体験となりました。

私たちがその日の午後病院に到着すると、そこは入り口からすでにクリスマスモード全開でした。病院とは思えないほどのきらびやかでハートフルな飾りつけの中、車イスに乗った 50 名を超える療養中のお年寄りとそのご家族・スタッフの皆さんで溢れんばかりのリハビリテーション・ルームに、司会の方のコールで私たちは「諸人こぞりて」を歌いながら入場し、コンサートは始まりました。

様々な本番の舞台と同様に、生徒たちは人前で歌う事による強い緊張感や「うまく歌えなかったらどうしよう…」という不安感をもって歌い始めましたが、一曲歌い終わった後の皆様の拍手でその呪縛から一気に解放されました。

生徒 MC の挨拶に続き 2 曲目は「牧羊羊を」。しっとりとした曲も楽しんで頂き、完全にその雰囲気^{きふき}に溶け込むことができました。3 曲目の “We Wish You a Merry Christmas” では、皆様に前もって配布してあった鈴を鳴らしてもらいながら歌いました。タイミングがずれても、楽しそうに鈴を鳴らしてくださるお年寄りの姿に、逆に私たちのほうが勇氣と元気をたくさんもらったと思います。

4 曲目。「いじめられっこの赤鼻のトナカイ



入場を待つ生徒達



「赤鼻のトナカイ」を熱演・熱唱

が、2人のサンタクロースに『今日はクリスマスじゃないか!』と励まされる」寸劇の後、もちろん曲は「赤鼻のトナカイ」。「劇団員(?)」の振り付けと共に、生徒達もこの時には「歌う喜び」「歌って喜ばれる喜び」をかみしめながら歌っていたと思います。

ここで生徒たちが一度退場しガウンから制服に着替えている間に、コーチ(2名)による独唱が行われ、「初恋」「箱根八里」など3曲が披露されました。高校生とは違うその訓練された素晴らしい歌声は会場の全ての人を魅了しました。

さて、制服姿でのコンサート後半は、日本の懐かしい唱歌や童謡を春夏秋冬の順に並べた「ふるさとの四季」です。「ふるさと」から始まり「春の小川」「朧月夜」「鯉のぼり」「茶摘」「夏は来ぬ」「われは海の子」「村祭り」「紅葉」「冬景色」「雪」と続き、再び「ふるさと」で終わります。全国で歌われている唱歌メドレーの傑作で私たちの大好きな曲でしたが、この日の演奏は一生忘れられないと思います。全ての曲と一緒に口ずさんで下さった方、懐かしそうに微笑みながら聴いて下さった方、そのようなお年寄りを介護しながら涙を流して下さったご家族の方…。この時ほど聖歌隊として歌っていて感動した事はありませんでした。高等部聖歌隊は歌う事が本当に大好きな生徒の集まりですが、それまで自分達の歌がこんなに無条件に人々に喜ばれたという経験をしたことがなかったので、まさに至福の瞬間でした。

この後、生徒たち手作りのクリスマスカードを一人一人に手渡して贈りました。紙を切

りメッセージを書きそれぞれに写真を貼って、80枚ものカードを作り上げるのは大変だったようですが、苦勞のかいあってこれは大好評でした。後で聞いた話ですが、療養中のお年寄りだけでなくスタッフやご家族の方からも「欲しい!」という声が上がリ、病院中で話題になったそうです。普段は減多に介護の必要なお年寄りに接する機会を持つ事のない高校生が、ぎこちないながらもお年寄りの目の高さで優しくコミュニケーションをとろうとする姿を見て、「ここで演奏する機会が与えられて本当に良かった」と心から思いました。

コンサートの最後は「きよしこの夜」。生徒たちはお年寄りの間に立ち、会場の皆様と一緒に歌いましたが、拍手鳴り止まず“*We Wish You a Merry Christmas*”をアンコールとして演奏し(再び鈴を鳴らして大盛り上がりでした)、私たちのコンサートは終わりました。

私たちは「自分たちの歌を楽しんで頂きたい」という一心で臨みましたが、逆にスタッフの方々をはじめ会場の皆様からかけがえのない贈り物をいっぱいいただいたクリスマス会となりました。介護に携わる仕事の尊さ、笑顔の大切さ、音楽で人々を幸せにしてあげられる喜びを学んだこの貴重な体験を、これからの聖歌隊の活動に生かしていきたいと思ひます。

今年の京浜病院クリスマス会は12月14日(木)に予定されており、高等部聖歌隊は再び演奏の機会を与えられました。私たちは、昨年以上に幸せな時間を皆様と共有するため、日々鍛錬を続けています。



感動を呼んだ「ふるさとの四季」

The earlier is better.



女子短期大学クリスマス行事

横堀 昌子

女子短期大学子ども学科助教授

女子短期大学におけるさまざまなクリスマス行事とその情景を、昨年参加した学生たちの言葉を通して皆さまにお届けしたいと思います。

○クリスマス・ツリー点火祭

学院全体で行う点火祭は、短大の学生たちにとっても、とても楽しみな行事です。昨年からは限の授業が短縮となり、全員が参加できるようになりました。

「点火祭には毎年、短大からハンドベル・クワイアと聖歌隊が参加しています。イエス・キリストの誕生を待ち望む待降節に入る喜びと感謝を胸に抱いて、私はこの2年間、ハンドベルの一員として参加させていただいてきました。点火祭は普段の演奏会や礼拝奉仕と異なり初等部から短大までの大勢で一つの曲を演奏するので、ハンドベルの響きの壮さに驚いてしまいます。点火祭までに参加する全員で合わせる時間があまりないので、本番前にテンポを変えたりと大変なこともあります。この学院にあってハンドベルに連なる皆で心を合わせた演奏が終わると、深い感動に満たされるのです。また、正門まで見渡せる舞台の上から見る参加者のともすろうそくの灯りの広がり、見慣れたいつもの風景とは異なり、一生に一度しか出会えないクリスマスのすばらしさがあり、青山学院の一員であるうれしさをかみしめるひとときです。」
(専攻科児童教育専攻 久保野 萌)

○クリスマスの準備

点火祭前後には、イエスさまの降誕を待ち望むアドヴェントをイメージし、学生が様々な準備を進めます。その中の飾りつけをご紹介します。



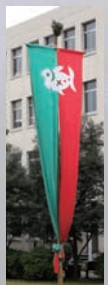
「私は、礼拝堂の飾りつけやリース作りに参加しました。礼拝堂飾りつけは、学生も参加し、それぞれがクリスマスのテーマにそって絵を板に描き、その板を礼拝堂の壁



にはつていきます。最初は何の絵を描いていいのかわかりませんでした。芸術学科の田島俊雄先生ご指導のもと、天使・羽・角笛など、自由にのびのびと描くことができました。絵はどれも個性があり、皆で飾ると礼拝堂全体が明るく心のこもった暖かい空間になっていくのが印象的でした。もう一つはリース作りで、華道部と一緒に一人2～3個作りしました。一つは短大に飾るため、一つは家に飾るためです。オーソドックスなリースからトナカイの顔をしたリースまで実に様々な形が作られ、図書館や各研究室前に飾られました。これらに参加し、クリスマスをより楽しめただけでなく校舎全体をクリスマスの雰囲気の中で包むことができ、参加して本当によかったと感じました。」

(国文学科2年 千葉のどか)

この他、短大特有のパナーが中庭にたちます。緑と赤の二色で魚をかたどったもので、家政学科の鈴木すず江先生によって作成されました。



○クリスマス・チャペルコンサート/クリスマス祝会

この二つの行事は学生たちによって企画・実施されます。打ち合わせを重ね、工夫をこらし、独自性を織りこみつつ準備をすすめる学生たち。親交を深め、クリスマスを迎える喜びを分かちあうときでもあります。

「クリスマス・チャペルコンサートは、聖歌隊、ハンドベル・クワイア、ゴスペルの3団体で毎年行う夜のコンサートで、私は、ゴスペル

のメンバーとして参加しています。私たちにとってチャペル・コンサートとクリスマスコンサートは大きな発表の場なのですが、とくにクリスマス・コンサートはその年のメンバーと歌う最後の場となるため、皆の思い入れも強く、集大成として心に残る演奏をしようと大切に取り組んできました。昨年は、より多くの方に来ていただきたいと、開催日・時間を皆で検討しました。また、毎年恒例となったゴスペルの最終曲『サンタが街にやってくる』にダンスや手拍子などを入れ、いつもの赤いユニフォームにサンタクロースの帽子を加えて、来てくださった方と一緒に楽しみました。今年は12月15日(金)18時から礼拝堂で行う予定です。クリスマスを多くの方とともに祝い、喜びを分かちあい、楽しく賛美する時間がもてたらと願っています。」

(専攻科児童教育専攻 澤田 美穂)



「短大に入学して初めての冬。私は、クリスマス祝会に参加しました。宗教活動委員の学生たちは行事や礼拝で様々な役割を担っているのですが、クリスマス行事に関心があった私は、友人と2人でクリスマス祝会の担当をすることになりました。祝会はまず礼拝の形式で始まり、学科をこえて参加した学生たち、先生や職員の方たちと一緒に讃美歌を歌い、ともに祈り、先生方からはクリスマスメッセージや歌のプレゼントをしていただきました。続く親睦会では、クリスマスの雰囲気に入れ、なごやかに語りながらケーキを食べ、プレゼント交換をしました。アットホームな楽しいひとときを過ごすことができたと感じます。祝会に参加し、とくに司会を担当できたことは、私にとって心に残る経験になりました。キリスト教活動を通して交流を深められたことに感謝し、これからたくさんの人との出会いを大切にしたいと思います。」

(英文学科2年 山口 志乃)

○クリスマス礼拝

女子短期大学のクリスマス行事の柱であるクリスマス礼拝。毎年、学生も教職員も出席する

ことができるように授業を1時間休講にして行っています。一人ひとりに与えられた賜物が用いられるようプログラムを考え、ともに礼拝をまもります。

「私は、短大のクリスマス礼拝に参加したのは昨年初めてでした。参加してみると私の教会で行われるクリスマス礼拝とは少し違って、さまざまな国の言葉で聖書が朗読されたり、ハンドベルやダンス、聖歌隊など、様々な方法で礼拝が奉げられていたことがとても印象的でした。また、昨年は梅ヶ丘教会の塩谷直也牧師が「正論ではなく」という題でクリスマスメッセージを語ってくださいました。「苦しい人にとって大切なことは正論ではなく理解なのです」という言葉が私の心に響きました。正しいことを言うことは時に必要かもしれませんが、しかし、その人の心に寄り添ってその人の気持ちを汲むことの大切さを教えられました。そして、それを確実に実行された方がイエス・キリストなのだと感じました。罪びとの私たちのところにイエス・キリストが人間としてお生まれくださったのが本当のクリスマスです。本当のクリスマス短大で祝うことができ、とても感謝でした。」

(専攻科児童教育専攻 松下 有香)



この他、関係諸団体へのクリスマス献金も全クラスで行っています。特に今年は新しい試みとして、献金先を覚えるため、学園祭で献金先の団体や福祉施設で作られた商品の販売をしたり、献金先紹介のパネルを学生たちが作って礼拝堂に展示したりしています。

街の中にあふれるにぎやかなクリスマス。そんな光景になじんできた学生たちが、キリスト教信仰に基づく教育を掲げる本学に入学し、さまざまな行事に楽しみながら参加していく姿。1～3年の生活の中でキリスト教に出会い、「とき」を共有し、体験を通してクリスマスの意味を考え始める姿。短大に連なる一人ひとりに、神様によって大事な「種」が蒔かれていることを感謝しつつ、今年も心あわせてクリスマスを迎えたいと思います。

Steve
Dawson is born.

クリスマスに寄せての 信仰のメッセージ

天のかなたから、はるばる来ました、
うれしい知らせを伝えるためです。
ようこそイエスさま、お入りください。
わたしのまずしい ころの部屋にも。
何をささげましょう、愛する主イエスに。
小さな祈りか、よろこびの歌か。

(マルティン・ルター)

羊飼いたちも、東方からやってきた博士たち
も、飼葉桶のかたわらに立ったが、それは〈改
心した罪人〉としてではなく、むしろ単純に、
ありのままに飼葉桶の方から引き寄せられた
ためにそうしたのである。

(ボンヘッフアー)

あなたは
わたしたち一人一人を
あたかもただ一人だけを、
配慮されるかのように、
配慮されます。
また、ただ一人を配慮されるかのように、
すべてのものを配慮されます。

(アウグスティヌス)

天の父よ、私たちの心にあなたへの思いが目
覚めるとき、うろたえて飛びまわる小鳥のよ
うにはなく、にっこり微笑んで眠りから覚
める子どものおようであらせてください。

(キルケゴール)

沈黙が実を結ぶと、祈りが生れます。
祈りが実を結ぶと、信仰が生れます。
信仰が実を結ぶと、愛が生まれます。
愛が実を結ぶと、奉仕が生れます。
奉仕が実を結ぶと、平和が生れます。

(マザー・テレサ)

主よ

わたしを平和の道具とさせてください
わたしが憎しみのあるところに愛を
もたらすことができるようにしてください
罪のあるところにゆるしを
争いのあるところに一致を
誤りのあるところに真理を
疑いのあるところに信仰を
絶望のあるところに希望を
闇のあるところに光を
悲しみのあるところによるこびを

ああ、主よ

わたしに
慰められることよりも 慰めることを
理解されることよりも 理解することを
愛されることよりも 愛することを
望ませてください

(アッシジのフランチェスコ)

(『アドヴェントから降誕の喜びへ——クリスマス・カレンダー』
深田未来生・丹治めぐみ編、日本キリスト教団出版局より抜粋)

『塩狩峠』

三浦綾子著 新潮文庫 1973年
(初版 新潮社 1968年)

馬越 嶺

初等部教諭

キリスト教文学作家として著名な三浦綾子氏は、キリスト教のことをあまり知らない方々にも広く親しまれている作家のひとりです。ここで紹介する『塩狩峠』という作品も、「新潮文庫の100冊」



に今年まで31年間選ばれ続けてきたことから分かるように、今まで多くの日本人に読み継がれてきた名作だと言えるでしょう。

私がこの作品と出会ったのは高校2年生の時でした。私はこの実話に基づいた物語を通して、具体的にキリスト者として生きることの厳しさ、そして素晴らしさというものを学びました。主人公である永野信夫は、悩み、葛藤し、時には強い反感を覚えながらもやがてイエス・キリストを自分の救い主として受け入れます。そしてついには、北海道塩狩峠を走る列車が突然暴走を始めたときに、同乗する人々の命を救うために己の命を犠牲にします。

この物語を読むときに心に迫ってくる聖書の御言葉が二つあります。一つは本の冒頭に書かれている御言葉で、ヨハネによる福音書12章24節の次のような有名な言葉です。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし」(文語訳聖書)。

そしてもう一つが、ヨハネの手紙一3章16節に書かれているこの御言葉です。

「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです」(新共同訳)。

物語に登場する伊木という牧師は言います。「みなさん、愛とは、自分の最も大事なものを人にやってしまうことです。最も大事なものは何ですか。それは命

ではありませんか」。キリストと出会った永野信夫は、この言葉に向かって、まさにその生を一新させていくのです。

私は両親がクリスチャンだったため、物心がつく前から教会に通っていました。洗礼は当時住んでいたアメリカの教会で14歳の時に受けたのですが、高校生になる頃には「キリスト教」に対する不信感が芽生えていました。そんな時に出会ったのがこの本です。私たちが「生きる」というとき、一体どんな価値観に立って生きるのか。何を己の指針とするのか。どこへ向かって一步を踏み出し、そして最終的に何を目標に走り続けるのか。この事がはっきりしていないと、一応「走って」はいても、どこかとんでもない「ゴール」へ自らを運んでしまうことになりかねません。「キリスト教信仰に生きる」とは、神の言葉である聖書に価値観をおき、指針は「イエス・キリスト」、「神の国の実現」のために一步を踏みだし、そして「天の御国(天国)」を目指して全力で走ることを意味します。高校時代、私は信仰に生きるということが一体何を意味しているのかつかみかねていました。キリストと共に歩むことが本当に価値ある生き方だと確信が持てず、他の思想、価値観などと天秤にかけて吟味していたと言ってもいいでしょう。

そのような私に「これが道だ、これに歩め」と強い確信を与えてくれたものの一つがこの『塩狩峠』であり、主人公永野信夫の生き方でした。

信夫は言います。「お互いにこのくり返しのかかない一生を、自分の生命を燃やして生きて行こう。そしてイエス・キリストのみ言葉を掲げて、その光を反射する者となろう。安逸を食するな。己に勝て。必要とあらば、いつでも神のために死ぬる人間であれ」。神のため、キリストのために生きること。それは「神を愛し、そして自分を愛するように隣人を愛する」という生き方です。自分の命を神のため、そして隣人のために喜んで用いていく生き方です。「絶対的な真理」という言葉が敬遠されるこの世の中にあつて、ただひたむきに「道であり、真理であり、命である」お方のために生きる。『塩狩峠』は、そういう生き方があるのだということを私にはっきりと示してくれた珠玉の名作です。

氣賀 健生

大学名誉教授

青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料紹介の第17回は、前回に引続き阿部義宗関係資料（その2）を御紹介することに致します。前回スペースの関係で、説明不足であったり、御紹介し切れずに洩れたものです。

まず、キリスト教界の人びとから阿部義宗あての書簡類。この中には本多庸一未亡人からの大正12（1923）年12月15日付の手紙があり、大正天皇の病状を心配しての如何にも明治人らしい記述があります。その他敷内敬之助、岡田哲蔵、山田寅之助、間島弟彦、川尻正脩など、青山学院やキリスト教関係の中心的人物の書簡です。またEdmund D. Soperの手紙は、オハイオ・ウェスレアン大学の理事会が、阿部義宗に神学博士の学位を贈ることを決定したという1931年1月3日付のもので、阿部の神学博士号取得の経緯がよくわかる貴重なものです。このSoperは初期の青山学院で宣教に携わった宣教師Soperとは別人でしょう。珍田捨己の手紙も残されています。珍田捨己は本多庸一の信頼篤かった弘前時代の弟子で、後に明治時代の著名なクリスチャン外交官となった人物です。それから「呈義宗君、八十二歳黙二老」という巻紙の書簡があって、人生の教訓めいた達筆の書です。この「黙二老」は阿部義宗先生を「義宗君」と呼んでいるのですが、どなたか御存知の方がいらっしゃれば、御教示頂きたいと思います。大変貴重なものと思われま。

龍田丸船上にて
54歳



1923年 関東大震災救援青山学院ボランティアトラックの中央に阿部義宗

次に若き阿部義宗を彷彿とさせるような文章を二つ三つ。まず弘前教会青年会誌『東光』に載った論説「基督降誕祭に際す」ではクリスマスの意義について長々と論じ、「余の望ましき人間」では、次のような書き出しで始まります。「諸君！ 僕ハ氣焔をはきたいが、肝心のスピーチは達者でない。殊にジャパネーススピーチはイヤハヤ御免だ。そんなら君、一番フレンチで？ 宜しいデハ君に通訳を願ふよ…」。次に1912（明治45）年、青山学院神学部卒業に際しての答辞の下書きがあり、彼の若き日の使命感が脈々と流れています。次に、尾崎信二氏、山鹿八郎氏、遠山元一氏夫人の葬儀に際しての葬送の辞の、阿部義宗の自筆原稿が残されていますが、切々と彼の心情を吐露しています。



1913年 初牧会記念 28歳

あとは阿部義宗関係の膨大な写真です。まず若き阿部義宗をはじめ壮年期から晩年に至る沢山のポートレート。特に、「大正二年二月一日・伝道記念・初牧会記念、阿部義宗、二十八年」と裏面に自らサインをした写真があり、彼の颯爽とした初陣の牧師姿がしのべられます。青山学院中学部長時代中学部の教員達と共に、また神学部長時代卒業生と共に、また院長室での執務中、さらに宣教師達との記念写真等々、彼の青山学院と共に歩んだ一生を偲ぶことができます。また1923（大正12）年関東大震災に際して、青山学院は流言飛語によって迫害された在日朝鮮人をキャンパス内に保護しましたが、阿部はその中心となって八面六臂の働き、救援物資を積み込んだ青山学院ボランティアの学生達を率いる彼の姿があります。1941年6月、第二次世界大戦の前夜、対米平和交渉に赴いたキリスト教界代表者達の団長として龍田丸の船上での写真。また1949年10月、敗戦後まもなくニューヨーク・リバーサイドのメソジスト本部の前の毅然とした立ち姿もあります。なお前号で御紹介した夫人と共に満面の笑顔の写真は金婚式

の時のものでした。

弘前教会で伝道者としての召命を受けた阿部義宗の若き頃の弘前教会関係。また第二次大戦中、中国にわたって日本軍の横暴をいましめ、中国の教会を援けることに全霊を盡しましたが、その「上海教友会」の方々と1972年8月24日、東京練馬教会で再会した時の記念写真という貴重なものもあります。阿部の感慨深そうな表情が印象的です。

阿部が「私の生涯で本当に心から神に感謝してやった仕事といえば、それは本多記念教会を創立し、仕えたことであった」と自ら述懐しているように、晩年の阿部がすべての公職から退いて、僅か13人の会衆と共に開拓した渋谷氷川伝道所が、やがて渋谷氷川教会＝本多記念教会へと発展するのですが、その教会の伝道所時代からの貴重な写真が「阿部牧師」の一心不乱の伝道者姿と共に数十枚、会員名簿と共に揃っています。また「日本メソヂスト弘前教会創立六十年記念号」と銘うった弘前新聞の特集（1935年9月22日）のコピーがあり、阿部義宗をはじめ、藤田匡、宮崎繁一、高橋豊吉、米村義雄他の元牧師、当時の赤沢元造監督など多士済済の論説が載っています。阿部義宗のポートレート他に、阿部と親交のあった人々のポートレートも多数ありますが、教会や青山学院関係人物の他では若い頃の東郷青児氏（ちなみに彼は青山学院中学部出身です）や伊藤喜朔氏など、思いがけないものも多々あります。

前号でも阿部義宗関係資料を御紹介しましたが、スペースの関係で殆ど説明・解説ができませんでした。以下二、三の資料について解説を補足しておきます。

まず彼自身の手書きの原稿のうち『みづからのほど』と『他の人のほど』一頁の『ほどほど』のいみは」と題されたエッセイについてであります。阿部の人柄を知るほどの方々は、この題を見ただけで如何にも彼らしいと思われるでしょう。これは内容からみて1955～65年の間に書かれたキリスト教教育同盟関係にかかわる執筆である



院長室にて 1937年ごろ

ことは間違いないと思います。次のような一節があります。「人に注意を与えるような場合、やはり『ほどほど』が必要である。人間というもの、自分の弱いところをつかれたり、またはみづからが悪いと知っているようなこと



1949年 ニューヨーク・リバーサイド・メソヂスト教会本部前にて

を、徹底的にきめつけられると、その注意がかえって逆効果になってしまうことさへある。『みづからのほど』を知る者は『他の人のほど』をも知りうるはずである。だから『他の人のほど』を思いやる心をもって注意を与へるならば、それは本当の『ほどほど』の注意となって他の人に受け入れられるであらう。まさに阿部の人柄そのものですね。それから、阿部義宗に関する記事の中で、「阿部義宗論」楠正人というのがあります。原文は『横浜青年』（横浜YMCA機関誌）264号（1938年6月1日）所載。楠正人は勿論仮名で、当時の横浜YMCA総主事久芳昇氏。痛快な論評で次のような件があります。「彼は普通の牧師でもない。勿論学校の教師でもない。彼は政治家としての素養も充分備へてあるし度胸の好い話せば分る男である。彼は相手にして手応へのある男である。」また、同じく「阿部義宗論」八幡太郎というのもあります。（新興基督教昭和6年）。著者は当時青山学院神学部教授比屋根安定氏。これは実に痛快な論評で次のような一節が目に入ります。「彼は教理を固く教へ込む牧師であるまい。雄辯流るる如き説教家でもあるまい。然し彼は統率の才があり、会員と共に泣き共に喜ぶ良い牧会者である…頭は社会的福音で胸は個人的福音とでも評さうか。」

以上前号紹介の史料の幾つかについて解説しました。



1912年 青山学院神学部卒業答辞の下書き

日本キリスト教団 ^{しろ} 横浜指路教会

立花慎一

本部秘書室

アメリカ長老教会から派遣された宣教師ヘボン (James C. Hepburn、「ヘボン式ローマ字」の考案者としても有名) が日本にキリスト教を伝道する志をもって来日したのは、1859(安政6)年10月のことでした。やがてヘボン塾で勉強していた青年たちを中心にして教会設立の機運が起こり、1874(明治7)年9月13日、アメリカ長老教会の宣教師ルーミス (Henry Loomis) を初代牧師として設立されたのが、横浜指路教会の前身である横浜第一長老公会です。(因みに、ドーラ・スクーンメーカーが青山学院の礎となる女子小学校を開いたのが、同年11月16日です。)

その後1892年に、現在の場所にヘボン博士の尽力により赤レンガのゴシック調の教会堂が建てられ、ヘボン博士の母教会の名“Shiloh Church”をいただいて「指路教会」としました。「路を指し示す」という意味の当て字ですが、聖書において「シロ」は、「平和を来たらず者」即ち「救い主」と、「古い時代の聖なる町」の両方を示す意味に用いられています。その会堂は関東大震災で倒壊してしまいましたが、1926年に現在のものに建て直されました。横浜市歴史

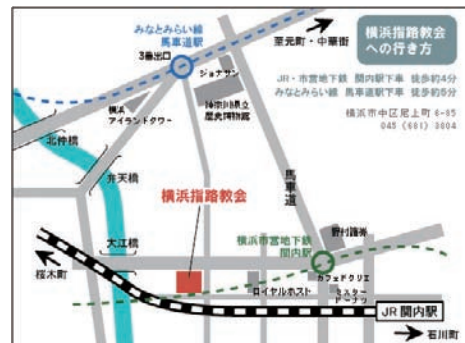


的建造物の指定を受けています。

現在の主日礼拝の平均出席者は約250名。教会学校には約40名の児童・生徒が集い、保護者たちも一緒に礼拝に出席しています。また、横浜という場所柄、近隣にはキリスト教学校が多くあり、礼拝出席者にもその教職員や在校生・卒業生などが多く見られます。主任担任教師の藤掛順一牧師は、本学相模原キャンパスでの大学礼拝の説教者として度々奉仕している他、フェリス女学院理事や明治学院評議員も務め、キリスト教学校の働きの重要さをよく理解してくださり、常に祈りに覚えてくださっています。

毎主日の礼拝は、教会学校9時、主日礼拝10時30分、夕礼拝18時、鐘の音に続いて、本学のガウチャー記念礼拝堂と同じマティス社製のパイプオルガンの前奏で厳かに始まります。教会の諸活動については、是非ホームページをご覧ください。

最後に、耳より情報の一つ。この春に東京神学大学大学院を修了して当教会に赴任された嶋田恵悟伝道師は、何と嶋田順好大学宗教主任のご子息です。学院では順好先生、教会では恵悟先生のご指導を受けている筆者です。キリスト教界は狭いと言いますが、こういうのも珍しいのではないのでしょうか。



横浜市中区尾上町 6-85
電話 045-681-3804
<http://www.yokohamashiloh.or.jp>

幼稚園 より

幼稚園ではアドヴェントクランツやツリー、リースなどの飾り付けをし、11月24日、12月1日、8日の金曜日にアドヴェント礼拝ⅠⅢを守りつつクリスマスを迎える準備をしてきました。子どもたちはイエス様の誕生を心待ちにしています。

クリスマス礼拝

12月15日(金)

聖誕劇を中心とした礼拝を守り、保護者の方々とともにイエス様の誕生をお祝いします。礼拝後に学院内にキャロリングに出かけ、クリスマスの喜びを多くの人に伝えます。

始業礼拝

2007年1月10日(水)

全園児で礼拝を守り、3学期の始まりです。

卒園礼拝

2007年3月8日(木)

年長児が幼稚園で最後の学年礼拝を守ります。

終業礼拝

2007年3月12日(月)

それぞれの学年の子どもたちの成長を喜び、今年度の歩みが守られたことを神様に感謝します。

卒園式

2007年3月13日(火)

幼稚園で3年間を過ごし心身共に成長した年長児が、神様への感謝にあふれて巣立っていきます。

(教諭 生沼晴美)

初等部 より

慣れ親しんできた旧礼拝堂の解体が進む中、その後ろには新礼拝堂の姿が見えてきました。2007年3月の完成をみんなで心待ちにしています。

保護者のためのクリスマス礼拝

12月8日(金)

在校生の保護者と来年度1年生になる方々の

保護者をお迎えして、クリスマスの礼拝を守ります。説教者には岸 憲秀先生(千葉本町教会牧師)をお迎えしました。

クリスマス讃美礼拝

12月20日(水)

初等部で50年以上にわたって同じ台本で演じられるページェントと讃美を中心にしたクリスマス礼拝です。場所は青山学院講堂。

説教は高津 俊先生(日本キリスト教団田園調布教会牧師)。

(宗教主任 小澤淳一)

中等部 より

クリスマス礼拝

12月19日(火) 14時~15時30分

青山学院講堂

礼拝はページェント形式で行われ、聖歌隊・聖書朗読などあらゆる奉仕が生徒によって進められていきます。そして全員で歌う讃美歌。決して変わる事のないクリスマスの喜びを確信するひと時です。

宗教講演会

2007年1月30日(火) 6時限目

青山学院講堂

講師：岩淵まこと氏

(ゴスペルシンガー・ソングライター)

宗教講演会は2年に1度行われます。今回は岩淵まこと氏をお招きして、賛美と証しの時をもちます。保護者の参加も可能です。

卒業礼拝

2007年3月14日(水) 8時40分

青山学院講堂

説教者：笹森建美牧師

(日本キリスト教団駒場エデン教会牧師)

(宗教主任 西田恵一郎)

高等部 より

クリスマス合同コンサート

12月16日(土) 大学ガウチャー記念礼拝堂

聖歌隊、オルガン部、ハンドベル部による合同コンサートはガウチャー記念礼拝堂で行われます。今年もオルガン部メンバーによるオルガン演奏、ハンドベル部のハンドベル演奏、聖歌隊の合唱によるメサイアが上演されます。

このコンサートは一般にも公開されていますので、誰でも入場できます。多くの方のご来場をお待ちしています。

クリスマス礼拝

12月19日(月) PS 講堂

第1部は特別礼拝で、聖歌隊の賛美とハンドベル部による演奏があります。クリスマス説教は、アーサー・ホーランド・ミッションのアーサー・ホーランド氏です。

第2部としてクリスマス祝会を行います。演劇部の生徒によるクリスマス・ページェント、ダンス部による降誕を祝う創作ダンス、有志3グループによるクリスマス・ソング演奏が行われます。
(宗教主任 坂上三男)

女子短大 より

クリスマス礼拝

12月13日(水) 13:00~14:30

青山学院講堂

説教: 増田 琴氏

(日本キリスト教団巣鴨ときわ教会牧師)

クリスマス・チャリティー・チャペルコンサート

12月15日(金) 18:00~19:00

女子短期大学礼拝堂

演奏: 聖歌隊、ハンドベルクワイア、ゴスペル

クリスマス祝会

12月20日(水) 17:45~19:00

N104教室

(宗教委員 西願広望)

大学 より

ランチタイム・コンサート

12月13日(水) 12:35~13:05

ウェスレーチャペル

演奏: 鷺 晶子氏(大学オルガニスト)

クリスマス礼拝

12月19日(火) ガウチャー記念礼拝堂

説教: 古屋安雄氏(聖学院大学大学院教授)

12月21日(木) ウェスレーチャペル

説教: 晴佐久昌英氏

(カトリック高円寺教会司祭)

第二部スプリング・カレッジ

2007年2月3日(土)~4日(日) 御殿場東山荘

講師: 山畑 謙氏(小金井緑町教会牧師)

オーストラリア・クリスチャンファミリー・ ホームステイプログラム

2007年2月18日(日)~3月10日(土)

(宗教センター事務室 平野修一)

本部 より

Art クリスマス Aoyama (クリスマス美術展)

11月28日(火)~12月22日(金)

短大ギャラリー他

教職員新年礼拝

2007年1月12日(金) 16:30~

ガウチャー記念礼拝堂

(宗教センター事務室 平野修一)

編集後記

先日、中等部の礼拝で3年女子の生徒が「見えないものを信じること」について話しました。また、キリスト教学校教育同盟の秋の研修会で講師の方が「見えないものを感じ、それを大切に育てる心をはぐくむのがキリスト教学校の使命だ」と発題されました。2007年もいよいよ師走になり、私たちは毎日のあわただしい生活の中で、とすると、見えているものまでも見落としてしまうことがあります。主のご降誕を迎えるこの時期、少しでも心を落ち着けて、私たちの見えないものへの思いを深めたいものです。

皆様、どうぞ、すばらしいクリスマスをお迎えください。

(林 謙二)

Wesley Hall News 第90号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 東方敬信
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537 (ダイヤルイン)
URL.<http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
E-mail.agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 万全社